下田歌子の教育の源泉

久保 貴子

1

実践女子学園の学祖下田歌子は、まさに時代の寵児であった。『京都新聞』（明治四（一八七一）年五月創刊）第五十六号には、明治六（一八七三）年一月という宮中出仕から三カ月足らずの極めて早い段階で、下田歌子を紹介する記事が確認される。おそらく、新聞紙上に下田が登場した最初のものと考えられる。[1]

……原来宮中女官ハ華族並ニ旧官人ノ女ノミ勤仕スルニ勢幾十五等出仕拝命スルハ全ク能歌ノ一徳ナリ方今文化日新ノ秋（トキ）婦女子ト雖モ文学ニ勉励セバ閨閤ノ模範トナラント京師留寓ノ旧岩村士族某ヨリ伝聞ノ侭投書ス一月十一日

この記事によると、当該記事の内容は、下田の出身である旧岩村藩（現岐阜県恵那市岩村）の士族某からもたらされたとのことである。郷土の偉人を広く知らしめたいとの目的があったと推測されるが、それにしても下田の出仕が、いかに異例の出来事で、衆目を集めるに十分な出来事であったかという、当時の状況を顕著に表しているといえるであろう。すなわち、「宮中女官として勤仕するには華族並びに官人の女（娘）でなければ叶わない」のにもかかわらず、「歌の一徳」によりこれが叶えられた。今は「文化日新の時」であるから「婦女子と雖も文学を勉励すれば閨閤の

模範にもなる」と婦女の指標としているのである。

明治十二（一八七九）年十一月『明治英銘百詠撰』、明治十四（一八八一）年四月『明治英明百人首』には、「平尾歌子（「ほともなき」の一首）」、「権命婦平尾歌子（「つれつれと」の一首）」それぞれの名で入集している。[2] これらは著名な鎌倉時代の『小倉百人一首』に倣い、当代の有名歌人を紹介するアンソロジーであるが、文字通り当代を代表する百人のうちの一人に選ばれている。『小倉百人一首』自体、女流歌人は全体の二割ほどにすぎず、女流歌人の歌が、それに採られるのは存外に少ないものであった。これらの明治時代に編まれた『百人一首』においても同じ事が言える。女流歌人は五名あるいは十名程度の入集に留められているのだが、ここに下田が、その中の一人（一首）として選ばれることは、その名が喧伝されていた証と考えてよいであろう。平尾鉐（下田歌子）は、異例な形で宮中出仕が許され、「歌子」の名を賜るほどの、当代きっての宮廷「歌人」として知られていた。

しかし、時を経た明治四十三（一九一〇）年の森鷗外の『青年』には、おそらく下田がモデルであろうと想定できる以下の一文が見受けられる。

「今一等待合にいた夫人は、当り前の女ではないようでしたが、君は気が附きませんでしたか。」

「気が附かなくて。あれは、君、有名な高畠詠子さんだよ。」

「そうですか」と云った純一は、心の中になるほどと頷いた。東京の女学校長で、あらゆる毀誉褒貶を一身に集めたことのある人である。校長を退いた理由としても、種々の風説が伝えられた。国にいたとき、田中先生の話に、詠子さんは演説が上手で、ある目的を以て生徒の群に対して演説するとなると、ナポレオンが士卒を鼓舞するときの雄弁の面影があると云った。悪徳新聞のあらゆる攻撃を受けていながら、告別の演説でも、全校の生徒を泣かせたそうである。それも一時の感動ばかりではない。級ごとに記念品を贈る委員なぞが出来たとき、ほとんど一人もその募りに応ぜなかったものはないということである。兎に角英雄である。絶えず自己の感情を自己の意志の下に支配している人物であろうと、純一は想像した。

「女丈夫だとは聞いていましたが、一寸見てもあれ程態度の目立つ人だとは思わなかったのです」[3]

この「高畑詠子」が下田歌子をモデルとしているとすれば、先に述べたような歌人としての一面ばかりではなく、すでに「英雄」「女丈夫」と記される下田像が存在していることになる。

作者森鷗外は本名「森林太郎」名義で、越後高田藩の、西園寺

公望篆額「琴臺東條先生碑」の碑文を撰している（大正九（一九二〇）年九月、碑文には下田にも触れている）。東條琴臺は、下田の祖父にあたる儒学者で、旧越後高田藩主、榊原政令に聘せられ越後高田で十二年間を過ごしている。こういった点からも、鷗外と下田との関係も認められて良いと思われる。（東京大学「鷗外文庫」には、鷗外自筆の「榊原政岑事蹟」、「古今史料 高尾考」などの書も残され、有名な高尾榊原事件についての鷗外の関心の高さもうかがえる）[4]。

無論、事実に基づくとされる新聞記事と、小説とを同じ俎上で論じることはできない。しかし、どちらもが、下田歌子を第三者がどのように受け止めていたか、下田がどのような印象で見られていたかを現していると考えることは可能であろう。すなわち「歌人」としての側面が色濃い宮中出仕から、演説が上手な「校長」として、「英雄」とさえ口端に上るに至る、下田歌子像の発展的な変貌が見受けられるのではないだろうか。それは一女性の成長という枠にはおそらく収まりきれない、下田歌子の強固な個性であり、生き様であるように思われるのである。

本稿は、第一級の歌人であり、時として英雄とまで称された下田歌子について、その源泉にあるものは何か、教育者としての側面から考察したものである。

2

明治維新によって、日本の伝統的な有職故実に則った「宮中」は「改革」を余儀なくされた。

従来、宮廷女房は貴族や尊貴な出自である娘たちが務めるのが慣例であった。ところが、明治の改革時にあっては「宮中の空気をして新鮮ならしめむ為侍従には既に士族をまじへたり女官にも亦士族にして学徳備はり（ママ）坤宮御文事（ママ）御あひ（ママ）をも仕奉べき人無きか」との要請があった。[5] 右の『京都新聞』が驚愕をもって記事を掲載したのは、まさに「文化日新」の時代背景があり、それを具現化した代表的女性として採り上げたものと想像される。下田歌子が出仕を許された宮中は、まさにその改革の直中であった。

下田の生涯の友である税所敦子は、明治六歌仙の一人に数えられるほどのやはり歌人であるが、税所もまた薩摩藩士族の出身である。楓内侍とも呼ばれた税所敦子は、島津斉彬の世継哲丸の守り役や近衛家の老女としての経験もあるため、下田と同一例とは考え難いのだが、こうした宮中改革の一環として参内が許される気風があった事実は認められるのである。[6]

結果からすると、後に教育者として歩むその道は、このような発端からして、改革を推し進めることが運命づけられていたように見える。

それでは、宮中出仕から間もない頃、当事者である下田自身は女官としての日常をどのように捉えていたのであろうか。出仕した当時の気持ちを詠んだ歌が、自撰歌集『雪の下草』に、[7]

明治五年の秋始めて宮城にまうのぼりしをり歌よめとありければ

敷島の道をそれともわかぬ身にかしこく渡る雲のかけ橋

と見えている。参内するやいなや歌を召されていることから、先の新聞の「和歌の一徳」により出仕を拝命したと伝える記事が裏付られるものでもあろう。[8]

またその一端を下田の『濱御殿に候して』と題する短い随筆作品により推しはかってみる。これは、明治三（一八七〇）年、宮内省の管轄となった「濱御殿」（現・浜離宮恩賜庭園）を、明治六（一八七三）年に訪れた際の記述である。[9]

十月の二十日餘り五日にかありけん。后の宮、御垣の外なる言の葉の花をもつどへてみそなはさむとて、濱殿へ渡らせ給ひぬ。風なき海の面しづかに、紫立ちたる雲のけはひ、春ならねどもいとのどかなり。

下田はうららかな秋の日、后に誘われて濱御殿へ同行する機会を得た。「かゝるほどに蹄の音高う聞えて、はやう御車は着かせ給ふと、つかさ人達西東に打ちそよめき、けいめいし歩くさまおごそかなり。」と伺候する人々の様子がその準備で慌ただしい中にも、おごそかなものであったことを伝えている。また「おほゆかには青き赤きあや織の敷物しき、白き大和織の御帳などうるはしうしなさせ給へり。流石になまめいたる女房達のすきかげほのめきて、白妙の袿衣はまだきに雪の色をうばひ、紅の袴はなほ入日の影をとゞむるに似たり。」と、見目麗しく誂えられた御座所や、優美な女房たちの様子に目を奪われている。

さらに、この場には跡見花蹊らすでに当時名の知られていた人物も召されており、「浦秋」という題を賜ったという。下田は、

人々絵島、和歌のうらとりぐ〳〵に春秋の情趣あつむる中に、あまの子のみ筆のたちども定めかねてたゞよはしげなるさまよ、いと人悪かりけんと、打ちひそまれぬ。かのゑあはせならましかば、おのれぞ負け方なる。あな苦しと打ち歎きて

おも白く見ゆるゑしまもあるものをたどりわづらふ歌の中山

というぐあいに、あまり上手く絵を描いたり、歌を詠ずることができない。もしもこれが『源氏物語』の「絵合巻」の場面のよう

なら負け方になる、何ともつらいものだ、と嘆く。いささか卑下した書きぶりであるが、おそらく緊張のためか思うように振る舞えなかった様子が見受けられる。しかし暮れ果てた帰り道では、「光はなくて影のみほのかなる夕月のさし出でたるに、物ひさぐ家々の火影にも、花やかなる御代の栄えはしるかりけり。」と安寧な御代を寿ぐことを忘れてはおらず、女房としての職掌意識が確実に芽生えていたことを知らしめている。そして巻末には、

己れは今日まで、見もしらざりし間毎々々の玉の燈火きらびやかに、磨きなしたるおほみ鏡にうつるを見るも、我ならぬ心地して、かしこさ嬉しさ言はん方なし。

うつゝとも夢ともわかず幻のうてなをたどる心地のみして因に記す。こは己れ宮仕してまだ一年に足らぬ程の事なり。

とある。今日まで見たこともなかった世界に足を踏み入れ、恐縮しながらも嬉しさは言い様もなく、まるで夢幻のようだという時を過ごしていた。「濱御殿」と呼ばれた離宮は、もと旧甲府藩の下屋敷として使用されていたものであった。その後、将軍家別邸、幕末の幕府海軍伝習屯所を経て、明治二（一八六九）年には外国人接待所「延遼館」となっていた。このような晴れがましい場に、出仕して間もない、年若い下田が同道を許され、感激と驚きをもってその体験を書き記そうとした。その心情は想像にあまりあるものであろう（「因に」以下の一文は、後日の付記と考えられる）。

3

宮中において、税所敦子という心強い先輩であり、生涯の知友を得たことは恵まれた幸運と言えよう。税所との関係は前稿において述べたので、ここでくだくだしく筆は割かない。[10] その後、出仕当時の名を「平尾鈺」として参内した下田が、歌人として確固たる地位を築いていくことは、後年「歌子」の名を下賜された著名な逸話からも広く知られるところである。

下田歌子は、明治十二（一八七九）年、およそ八年に及んだ宮中生活を経て拝辞した。そして明治十七（一八八四）年、明治天皇皇后美子妃の思召による華族女学校創立のために、宮内省御用掛として再び公の場に登場する（『実践女子学園一〇〇年史』）。[11] この下田の任官については、従来詳らかに言及されてきたとは言えない。下田はなぜこのような要職に任ぜられたのであろうか。もちろん宮中時代には、その教養と素養の高さは認められていたであろうし、先に確認したように歌人としては名を馳せていたと理解される。宮中時代には、碩学鴻儒の御進講を陪聴する機会も得たであろうことも（「宮内省改革案の一つとして、皇后・女官

が和漢古今西洋の事情を知って時勢に通じる必要性から、平素より読書に励み、天皇が進講を受ける際には陪聴するべきであるとの意見が出されていた」との指摘もある。[12]、また高官との人脈が培われたことも想像に難くない。しかし、それが学校創設へ向けての任官に直結するとは考え難いのではないだろうか。

当時、宮内卿の要職にあったのは、参議でもある伊藤博文である。戊辰戦争直後の極めて早い段階で、木戸孝允は一般人民の教育をただちに振興すべきと主張した（「普通教育の振興を急務とすべき建言書案」明治元・一八六八年）[13]。伊藤も「人々ヲシテ知識明亮タラム可シ」（「国是綱目」、明治二・一八六九年）と述べた建白書で知られている。[14]このような意見に領導され、男子の教育制度は明治十二（一八七九）年「教育令」、明治十三（一八八〇）年「改正教育令」、明治十四（一八八一）年「中学校教則大綱」の公布、明治十九（一八八六）年の「中学校令」制定と着実に整いつつあった。しかし、女子の教育制度は明治三十二（一八九九）年の「高等女学校令」の公布を待たねばならない。

この女子教育の黎明期に、伊藤の心中にあったのは何か。伊藤は、同郷であった吉田松陰の門下生の一人である。少年期には松下村塾に学び、松陰から「才劣り、学幼し。しかし、性質は素直で華美になびかず、僕すこぶる之を愛す」と評され、「（伊藤）俊輔、周旋（政治）の才あり」と言われている。

伊藤は、師・吉田松陰が遺した女子教育論の導きに重きを置いたのではないかと考えたい。安政六（一八五九）年十月、所謂安政の大獄で斬首された、この師の遺骸の引き取り役も伊藤であった。

吉田松陰は、長く女子の教育が家庭に委ねていることを疑問視し、女学校の創設を提唱している。『吉田松陰全集』を編んだ玖村敏雄は、この松陰の論は「『凡そ生を天地間に稟くる者、貴となく賤となく、男となく女となく、一人の逸居すべきなく一人の教なかるべきなし』といふ普通教育の要求と特に土分の者の女子教育の重要性を認識していたことによる」としている。[15]吉田の女学校論は、以下のようなものである。[16]

国中に於て一箇の尼房の如き者を起し、女学校と号し、士大夫の寡婦、年齢四五十以上にて、貞節素より顕はれ、学問に通じ、女工を能くする者数名を選挙し、女学校の師長となし、学校中に寄宿せしめ、扨て士大夫の女子八歳若しくは十歳以上の者は、日々学校に出だし、願に因りては寄宿も許し、専ら手習・学問・女功の事を練熟せしむべし。教法極めて厳整を要す。曹大家の女誡に、女子の教学なきを嘆じて、禮に八歳始めて之れに書を教ふ、十五にして学至ると。独り此れに依りて以て則と為すべからざらんやと云へり。先づ吾が心を獲ると云ふべし。（中略）女教の本は、恐ながら君公の後

宮より始むべし。後宮へ、貞節にして学問ある、曹大家や宋若莘・若昭の如き婦女を得て後宮の女官となし

入学資格を「士大夫の女子」と限っての考えは、男子の藩学と同様に規定したものであろう。また、「婦人書を読むは男夫と同じからず」とも述べているので、[17] おそらくここでいう学問も、男子が学ぶ漢籍を主とするものでもないだろう。修業年数の規定にも触れられてはいない。曹大家が『礼記』の例を引いて、男子が八歳から書を習い十五歳で大学に入るのにも拘わらず、女子はこれを則とすることができないことを嘆いたことを「吾が心を獲る」と述べるのは、女子にもより高い教育の必要を感じていたにほかならないだろう。

さて、右の一文で注目すべきは、女教師論である。吉田松陰は「士大夫の寡婦、年齢四五十以上にて、貞節素より顕はれ学問に通じ、女工を能くする者数名を選挙し、女学校の師長となし」という。また「女教の本は、恐ながら君公の後宮より始むべし。」と提言し、後宮へ、曹大家や宋の若莘・若昭の如き「貞節にして学問ある婦女を得て、後宮の女官となし」とも続けている。[18]

華族女学校創立前夜の下田の状況を鑑みるに、少しく若年ではあるものの、吉田松陰の考えに照らして、まさに適任といえるのである。宮中を退出した後の下田は、教育の現場へ足を踏み出していた。すなわち、下田学校、桃夭学校である。この私塾とも言うべき私立女学校の最初の門下生と言われる、木野久子の証言には（『下田歌子先生伝』）[19]、「お嬢さんがたは割合少なく、いつもお見えになるお弟子といへば、伊藤公爵夫人、山縣公爵夫人、田中（光顕）子爵夫人、そのほか大臣方の奥様たちでした」とある。山縣有朋は、伊藤と同郷の長州の出身で（高杉晋作が創設した奇兵隊の軍監でもあった）、第一次伊藤内閣の内務大臣の要職にあった。田中は土佐勤王党の一人で、脱藩後は高杉を頼った人物、やはり第一次伊藤内閣で内閣書記官長を務めている。同じく木野によると伊藤を始めとするこうした高官たちの親族が、下田の学校で国文、漢学、習字、時には裁縫や琴の稽古などもしている。[20] すでに下田の学校は、彼らが親族を通わせるに十分な教育現場として実績をあげ、相応の信頼を得ていたとも言えるだろう。

明治十八（一八八五）年九月、華族女学校は皇后美子妃（後の昭憲皇太后）の令旨により設立された。明治十（一八七七）年、男女の華族の生徒を教育する目的で創設された学習院が、明治十七（一八八四）年の華族令制定、華族就学規則制定など華族制度が整えられていく中で分立し、華族女子のための学校が必要とされたのであった。先に触れたように下田は、この準備のために宮内省御用掛となり、次いで幹事兼教授、学監となる。

4

文化や教育において西欧化、近代化は急を要しており、その象徴的役割を担ったのは、皇后美子妃であった。明治十九（一八八六）年二月の皇后の華族女学校行啓では、早くも下田が編纂した宮内省版『和文教科書』が生徒に下賜されている。翌二十（一八八七）年三月の行啓でも同じく同書が下賜されている。[21]皇后は、明治六（一八七三）年十一月の開成学校への行啓を皮切りに、明治四十五（一九一二）年まで四十年間、合計八十二回に及ぶ行啓を行っている。このような教育機関への行啓を始めとする皇后の奨励方法は他に、学校への賜金、教科書などの編纂・頒布などである。明治八（一八七五）年女子師範学校、同十二（一八七九）年鹿児島女子師範学校へは御歌「まがかずば」の下賜、同二十（一八八七）年華族女学校へは御歌「金剛石」「水は器」の下賜もなされている。[22]下田の『和文教科書』[23]以外には、皇后自ら西村茂樹に編纂させた『婦女鏡』（明治二十・二十一年下賜）や税所敦子の歌集『御垣の下草』（明治二十二・二十五年下賜）、小出粲が著した明治天皇・皇后の行幸啓の紀行文『みくるまのあと』（明治二十四・二十五年下賜）などである。これらに先んじて下田の著作が下賜されたことは、皇后の下田への信頼の高さが窺い知れるものであると同時に、この教科書が担う期待と役割が大きかったことも認められるものである。

5

さてこの頃（明治二十一（一八八八）年五月）、下田は四十四日の旅に出ており、その旅行記を残している。末尾に「昨日ばかりの事のやうに覚ゆるを、旅衣重ね来し日数をかき数ふれば、はやう既に四十四日が程にぞ成りぬる。」と記し、『四十四日の記』（『香雪叢書　第一巻』）[24]と題される。『枕草子』など古典文学の影響も色濃く認められる流麗な美文で綴る旅日記である。下田はその前年、気管支炎を患っており（『下田歌子先生伝』）、その療養方々関西方面へと赴いている。一見すると、まさしく病気療養のための母と同行した旅の記と見え、また従来そのように受け止められてきた節もあるのだが、この旅の記録を詳らかにすると、下田の別の意図も垣間見えてくる。

> まづ土方宮内大臣のみもとに、しばし病を訪らはれつるかしこまりも申さんとてもうでゝ、ことの序にかう〳〵と漏らし聞えつれば、そはいとよき事なり、病がちにては何事かはならん、且は各地の女学校などをも視ば、かたへは公の御ためにもこそならめ。速かに思ひたち候へとある。

この旅行は、二十年ぶりに故郷岩村を母とともに訪れたものと

して知られている。末尾近くに語られる岩村訪問は、時の流れを痛感しつつも極めて感動的で「身の幸の忝けなさも思ひ知らる」ものであった。しかしながら、冒頭に記される、この旅行を願い出た折の「各地の女学校などをも視ば、かたへは公の御ためにもこそならめ。」という土方久元（旧土佐藩士、第一次伊藤内閣に入閣以来、宮中職の履歴が多い）の言葉にも注目すべきではなかろうか。つまり、各地の女学校の視察という使命にも似た目的も重くあったと理解されるのである。作品中に「明日より大阪兵庫の府県の、女学校にものせんと、かねておきてたれば」と書いているので、当初よりこの視察目的で旅程が組まれていた可能性すらある。

先に述べたように、皇后の教育現場への行啓は甚だ多い。皇后の教育の改革の中心は、華族女学校と東京女子師範学校であったが、その行啓の回数が最も多かったために、華族女学校は「皇后の学校」とのイメージが定着していく。しかし、その反面で行啓先は、女子教育機関に限定されておらず、より幅広い階層を対象とする学校と関係を持っていた事実がある。[25] このような皇后の意識的な行動は、少なからず下田へ影響を及ぼしていたと考えるのが自然ではなかろうか。この旅の記の内容を大別すると、次のようになる。

（一）　学校視察
（二）　滞在先での面談、歌会など
（三）　名所・旧跡を訪ねての感慨

先ず、下田が訪問した主な学校を以下にあげる。

愛知女学校（英語科・裁縫科・幼稚園）、（愛知）師範学校・附属小学校、女子英和学校、岐阜師範学校附属小学校、岐阜学校（高等尋常小学校）、（京都）高等女学校、盲唖院、（兵庫）尋常師範学校附属小学校各学科、（大阪）高等女学校、愛敬女学校、梅花女学校、大阪女学校、堺女学校、相愛女学校、（滋賀）尋常師範学校附属小学校女子部、同志社女学校、岩邑小学校

下田は、行く先々で時には一筆と求められたり、宿にも対面を求める人々が多いことを嘆いてもいる。おそらく、そうした人々との対応には、自身快しとしなかったことも多かったと推測されるのだが、およそ二十校に及ぶ学校訪問は、むしろ積極的というべきで、それも女学校に限られたものでもないことは看過すべきでないだろう。五代友厚の後室ら当時の高官夫人と面談したり、知事、師範学校の校長、女性教員らと意見を交わしてもいる。例えば、名古屋の師範学校の生徒には「其の姿態他に異りて、勇壮の気満ちたるやうに見えしは、全く教育の然らしむる所なるべし。」と述べるが、「男子に比べては、女子の方は遙に立ち後れてぞ見えし。」として「こも今の知事の、いたくこゝに意をそゝがると云へば、早晩、好結果を得る時あるべし。」と続けている。また、大阪では「府下の富と人口とに合わせては、住民の教育に熱心なるが稀なりと、その官人達の打ち歎きたりし、思ひ合すれ

ば、げにと思ふ事多かり。」と実感を述べる。

当時多く設立されたキリスト教の学校も訪問している。梅花女学校では、教授する米国夫人たちの熱心さに感心し、「彼の国の人は遠く人の国に渡りてだに、道の為に斯くこそ心を尽くせ。況んや畏こき官位を有ち、国税よりする俸給にあきて、その道にあたれる我等がつとめ、豈、軽々しくおもふべきかなど思へば、背に汗出でゝ面さへ赤うなりけんかし。」と改めて襟を正してもいる。

また下田は後年（明治三十二・一八九九年）、実践女学校・及び附属慈善女学校とともに、女子工芸学校・及び附属下婢養成所を創設するが、この旅の記にはすでに「生徒が物したりと云ふ押絵やうの物、殊に精巧を極めたり。いかで女子職業学校やうのものにもなして、これが販路を求めば、一つは本邦の美術を勧むるはしだてともなりぬべきをなど、そこの人々に打ち語らひつ。（愛敬女学校）」と記している。女子職業学校を企図する発言であり、女性の経済的自立を目論む姿勢が窺い知れる記述であろう。京都府下の盲唖院を訪ね「生徒がつくれる種々の物つらねたる所に導る。なみなみならぬ身にて斯くも出でつるよと思ふに、涙もとゞまらず。」と記すが、これも後年の愛国婦人会の設立（明治三十四・一九〇一年）へと発展していく意志の芽生えの時期とも言えるのではないだろうか。

以上のように、『四十四日の記』にはまさに下田が実際に視察した時の様子と率直な意見などが如実に綴られているのである。

近世から近代にかけてこのような女性の手になる旅日記はなくはないが[26]、その多くは今でいうガイドブック的な役割も担っていた部分が否めない。しかし、下田のこの作品は日次の記の体裁をとっていないため、例えば行程の参考とはならないのである。明確な日付が記されるのは出発してからの数日で、出発の五月二十三日こそ「午後一時三十分の汽車に辛うじて乗りつる。」など詳細だが、その後は「次のあした」「またの日」「次の日」「明くれば」と書き続けられていく。

また、この旅には、母・平尾房子も同行しており、帰路四日市より船路をとろうとすると「母君は来しをりの船路に懲り給ひしかば、引き別れて陸路を帰り給ふべしとて（中略）、此の日頃同じ所に起き臥し馴れまつりしかば、さすがにたゞならず。」と随時気にかけている様子は散見される。また、父・平尾錄蔵についても「今迄見つる山川の景色の愛たかりし程も、見せ奉らんの心動きはしつれど、こゝにてぞ諸共に率て奉らぬ憾、遣らん方なく覚えし。」と、同道できなかった事を悔いてもいる。一見すると、私的な療養の旅の記録のようであるが、度重なるそこで披見したことの詳細な記述を見ると、その報告書としての趣きが強いことも実感される。自己目的に終始するものではなく、このような教育・女子教育に関心が高い読者を想定して書いていたのかもしれない。

女子の衣装や髪型にも目を留めた記述もある。「此の県には、女子の束髪したるだにさらに見ざりしが、こゝなるはみな束髪にて、洋装したるも交じれり（愛知女学校）」、「女子は、大むね束髪に袴着たり。此の束髪は、都下にては、幼きはふり分髪のごと打ち垂れたる、或は二つに三つに編みて下ぐる事にて、若しさらぬも、編みたる末をあげて、紐してくゝる事なるが、こゝのは、齢六つ七つばかりなるも、みな大人のやうに束ねたれば、ふと似合無くぞ見えし（岐阜学校）」、「洋装したるはまれにて、大方は常の衣服に袴着たるなり（京都高等女学校）」、「生徒は束髪したるが多くて、日本風に結びたるは稀れなれど、大方尋常普通の風俗にて、洋装したるも、袴はきたるも少なし（大阪高等女学校）」などである。

後の明治四十一（一九〇八）年、演題に立つ下田を活写した記事には「頭髪はいはゆる下田式の束髪で、一体にそれを上の方へあげて結び、廂も髷も大きく出してゐるのだから、頗る聴衆の眼を惹きやすい。（小野田翠雨「第一流の価値充分（現代名士の演説ぶり）」）[27]」と見えている。このような髪型や所謂「海老茶式部」と称する女学生風俗を世に定着させるに至る[28]下田ならではの着目点であろう。

出発後まもなく下田は「女生徒は、男子が十が一なり、名古屋にてだに、十が二ばかりには過ぎざりしかば、況て理りにこそと思ふに、これからの女子の位置を高めて、欧米と其の隆を競はん日は、なほいと遙かなるべし。如何してかは、過不及なき淑女賢婦を作り出すべからんなど、ひとり心の中に思ふ。」とその苦しい心情を吐露している。その一方で、行く先において「女子教育の心ばへ説き聞かせよと、請はれたれど、例のいたつきにより辞したりしを、さるうるはしだちたるさまならでも、打ち解けたるまど居に、たゞ一言だにと、切に請はれしかば、集へる人々の問ひに答へて、一言二言、心に打ち思ふ事、語らひ出でつゝ、立ち帰らんとするに、せめては講堂に掲げん料に、これに一筆と強ひらるゝ（相愛女学校）」、「教育の事一言説きてよと教員たちの請ひしかど（岩村小学校）」という要請も多くあったと思われる。おそらく今後の教育の方途において迷いの中にあった下田は、全編において積極的に要請に対応しているとは言えない。この時の下田には、自らの教育論を披瀝する様子は見受けられないのである。しかし、ただ一箇所だけ例外がある。そこには、下田の打ち解けた様子がうかがえる。それは、奈良県知事邸を、「まづ速く訪らはまほしけれど」と望んで訪ねた折のことである。「女学校にものせんとて問ふに、此の県は設けられし日の浅くて、何も〳〵整はねば見らるべきも無し。今より勧めん女子教育の方法は如何してかは、など言はるゝに、心隔つべきにしもはたあらぬあたりなれば、心に打ち思ふ事ども打ち出で聞ゆ。」と記す。時

の奈良県知事は税所篤である。税所は、西郷隆盛、大久保利通とともに薩南の三傑とよばれた人物であり、大久保の推薦で西日本の県令・県知事を歴任している。前任の堺県令・県知事時代には、女工場（女学校）や教科書の出版などの教育行政にも秀でていた。この対談の詳細は文中に記されないが、この薩摩閥の重鎮を前に、下田がこれからの女子教育について語ったことは、今後の教育現場の青写真を描き整理するまたとない機会であったはずで、同時に下田が教育者として認められていた証左とも思われるのである（「このみむすめは、わが学びの窓にも在して、親しかりしかば、いとう悦びて待ち迎へらる。」と教え子の親でもあり、歓待を受けたことが知らされる）。

また、この旅の記は六十余首の歌を含み、歌日記的な側面もある。京都御所では「移り変る世のたゝずまひとは言ひながら、我が輩のかくてこゝに参上る事も、たゞ夢の様にて、畏くぞおぼゆるや。」と感激し

立ち帰り言ば捧げん橘の花はむかしの香に匂ひきと

大宮の花橘のかげに来てひとり血になくほとゝぎすかな

と詠じている。いずれも宮中に奉仕する我身の光栄を感涙をもって詠んだものであるが、「桂園の翁聞かれたらんには、言ひがひなしとやさげしまれぬべし。」と続け、桂園派（御歌所派）の中心的歌人高崎正風が聞いたら、褒められるものではないだろうという。

その高崎とも交流があり、伝統文化の維持復興につとめた山階宮（晃親王）の月並の歌会も記録されている。中でも、かつて税所敦子の局にもいたという石井みつ子老刀自の、

昔だに袖狭かりし荒栲の衣とともに身ぞふりにける

の一首には「心あはれにて、歌がらも殊に愛たくぞおぼえし。」と感動し、自詠の

綾錦たちゐにつけて思ふかな美き衣きたる身のかしこさを

の一首は「さし並ぶべくもあらず。まことに恥かゞやかしくて、こゝに記さんもいとわびし」と綴っている。

総じて、この旅の記からは、当時の下田の置かれていた状況をつぶさに垣間見ることができるだろう。先に述べたように、当初から地方の教育現場の現状を視察する目的も察せられた。

自身の旅の記として、記録する意味ももちろんあろうが、教育に関心が高い読者の眼を意識した記述も認められるのではないだ

ろうか。

さらに気づかされる点がある。先に見たように、所謂維新の際の勤王の志士たちとの関連は深い。例えば、嵐山を訪ねた際「天龍寺には、維新前かの蛤御門事件より少し前つ方、此処に長州藩士の屯せりなど聞く。感慨浅からず」と記す。また「八坂の堂のあたりより高台寺の故木戸公の墓所なども遙かに拝みて」とも記す。その一方で、黒谷（金戒光明寺）に参った際には、総門の松の見事さや、熊谷蓮生の鎧掛松などを観ての感想に終始するのみである。黒谷は、旧会津藩京都守護職の本陣が置かれたことで知られる。しかし、この事には一切触れようとはしないのである。このような下田の執筆姿勢は重要視すべきではないか。この道の記が、自身の単なる旅の記として綴られたのではなく、ある種の視察報告としての意味もあったのではないか、と思うのである。

また皇后の事蹟は主に、教育の他、殖産、社会事業の振興と発展などがあげられる。旅の記の巻末近くで故郷岩村を訪ね、「流石に嬉しき事なり」と素直に綴るが、「惣じて此の地は、はやくより養蚕の業営む者少なからざりしが、歳月に添へて、いとゞ多く成りぬと伝へ聞きしが、げに桑苗の生ひたち他にすぐれたり。（中略）輸出も年々に殖えて行くよし、最と〳〵嬉しき事なり。」と皇后の意思に添うような一文もある。

先に掲げた、皇后からの下賜の書物の中に、小出粲の『みくるまのあと』（明治二十三年五月識語）があった。この書は、明治二十三（一八九〇）年四月から五月に行われた、明治天皇・皇后の京都・奈良・兵庫行幸啓の様子を、これに供奉した御歌所勤務宮内属であり、後には寄人となる小出が記録した紀行文である。御歌所の所長であった高崎正風や税所敦子、柳原愛子らの歌も織り交ぜられている。書名は、高崎の詠んだ「この春の夢のこてふはいでましの花みくるまのあとやおふらん」の歌から採られている。その跋文によれば、「此日記、こたび活版にすべきよし、おほせごとあり。」とあるので、もと小出の日記であったものを、皇后の「おほせごと」により刊行された事情が知らされる。

このような事を鑑みるに、下田がこの旅から帰還した折には、その記録として、範囲は限定されるだろうが、当時の高官や宮中の人々の間で読まれる事があったのではあるまいか。右に見てきたように、それも想定した下田の書きぶりとも受け取れるのである。

6

下田歌子の主家であった明治天皇妃皇后美子は、「近代の皇后」と言われる。明治時代の幕開けとともに、急速に近代的な国際化が進む日本を具現する一つの象徴であったからである。東京女子師範学校の開校を前にしての皇后の方針は、「女子の学問は子供

に対する教育の基礎になるのでおろそかにすべきではない」であった。「皇后の分身」とも言われた下田は、良妻賢母としての女子教育を領導したと捉えられることも多い。確かに下田の著作には「良妻賢母」の文言が用いられることが多いのは事実である。しかし、下田においてこの意味を理解しようとすれば、より深く、また慎重に検討を重ねることが必要であろう。その受容の仕方には一種の「ねじれ」が生じているように思われるからである。例えば、下田の門下生であり、時事新報の記者となった大澤豊子の証言に聴こう（「永田町時代の下田先生」[29]）。

> 明治三十二（一八八九　稿者注）年社会は今日と全く事情を異にしてまだ女子の職業に就くことを侮辱した時である、女子職業の門扉は堅く閉されて居た時であるにも拘らず、私は時事新報の記者となった。（中略）私が進んで男性の中に突入して就職したのは、全く先生が「女子職業の開拓の為めに奮発せよ、時事新報ならば必ず福澤先生の余薫があらう、先生は婦人の擁護者である、（中略）事あるときは毅然として立て……」と激励された（中略）当時上流婦人の教育に従事された先生は、又かく一般婦人の往くべき道も、時代に率先して指導されたのであった。

この発言によれば、むしろ積極的に女性の社会進出を促している下田が存在しているのではないか。振り返るに、本稿冒頭で紹介した力強い下田像と重なってくるように思われる。

7

明治二十六（一八九三）年、下田は欧州視察へ赴いている。[30] 華族女学校で女子教育の現場にたち、その最前線にあって領導してきた存在であったことは間違いないのであるが、西欧化のすすむ国内にあって、それは避けては通れない状況であったと推察される。従来、この二年間に及ぶ視察によって、下田はより広い階層の人々の教育の重要性の目を開かれたとされてきた。無論、チェルトナム・レディーズ・コレッジのドロシア・ビール校長との邂逅を初めとする生活や、有名なヴィクトリア女王との謁見などの経験は衝撃的であったと想像するにはあまりある。しかし、右で確認したとおり、そういう思いはかなり早く、華族女学校時代から芽生えており、むしろその考え方が、海外渡航で下田の信じる道として確認された部分が大きかったのではないだろうか。

この欧米視察、帰国後の下田の教育についても論じていく必要があるが、もはや紙面も尽きた。これについては、今後別稿を準備するしかない。本稿では、宮中出仕から女子教育の先頭に立つ

に至る下田歌子の教育活動を主として書き残した文藻から確認してみた。

国内の幅広い教育機関を視察する下田は、真摯にして情熱的であり、皇后をはじめ開明的な人々と協力して新しい女子教育の擁立のために邁進していた。欧米視察前後で下田の教育観が大きく変わることはなかったと言えるだろう。

■注

1 小林修「下田歌子の宮中出仕と〝歌子〟名下賜前後の考察」（「明治聖徳記念学会紀要」復刊第五十号、平成二十五年十一月）。

2 注1に同じ。

3 「普請中　青年」（『森鷗外全集2』筑摩書房、平成七年七月）。同書は「モデルは下田歌子（一八五四―一九三六）。歌子は歌人・教育家。学習院女学部校長、帝国婦人協会会長をつとめた。」と注記している。なお、湯浅茂雄も講演会「下田歌子に学ぶ」（実践桜会仙台支部「みちのく会」主催、平成二十六年九月）に於いて、下田をモデルにした意義を掘り下げている。

4 東京大学図書館・情報基盤センター、鷗外文庫書入れ本画像データーベース。

5 「こゝろの華（第三巻第二）」（明治三十三年二月）（拙稿「下田歌子の和歌教育――人生と和歌――」「女性と文化」第二号、平成二十八年三月）。

6 注5拙稿に同じ。

7 下田歌子著作集『香雪叢書 第二巻』実践女学校出版部、昭和七年十二月。

8 注1に同じ。小林は、歌子名下賜の契機となったのは、この「敷島の」の歌、あるいは「うれしさを包む袂にこぼるるは恵のつゆのあまりなるらん」の歌を含む二首と指摘している。

9 下田歌子著作集『香雪叢書 第一巻』実践女学校出版部、昭和七年十一月。

10 注5拙稿に同じ。

11 実践女子学園一〇〇年史編纂委員会、平成十三年三月。

12 真辺美佐「昭憲皇太后の教育奨励に関する再検討」（「明治聖徳記念学会紀要」復刊第五十号、平成二十五年十一月）。

13 佐藤秀夫「近代教育の発足」（『岩波講座 現代教育学 第五巻 日本近代教育史』岩波書店、昭和三十七年二月）。

14 注13に同じ。

15 「吉田松陰の思想と教育」岩波書店、昭和十七年二月。

16 『吉田松陰全集 第三巻』（山口県教育会、岩波書店、昭和十年三月）

17 注16に同じ。
18 注16に同じ。
19 故下田校長先生伝記編纂所、昭和十八年十月。
20 「桃夭学校学科課程表」（明治十五・十六年）でも確認される（『実践女子学園一〇〇年史』注11に同じ。）
21 注12に同じ。
22 小林賢太「「金剛石　水は器」に関する一考察――生成背景と詠歌意図をめぐって――」（「学習院女子部論叢」第十二号、平成二十八年三月）。
23 拙稿「下田歌子の『和文教科書』考「六之巻　更科日記」を中心に」（「女性と文化」第一号、平成二十七年三月）。
24 注9に同じ。なお、実践女子大学図書館には、自筆の草稿二点（下田歌子関係資料出納番号二七五・二七六）、及び原稿用紙を用いた浄書原稿（同二七七）が蔵されている。これらについての詳細は、別稿で論じたい。
25 注12に同じ。
26 津本信博編『近世紀行日記文学集成　一』（早稲田大学出版部、平成五年二月）など。
27 注19に同じ。
28 大関啓子「実践躬行―下田歌子　女子教育への道―」（「明治聖徳記念学会紀要」復刊第五十号、平成二十五年十一月）。
29 実践女学校桜同窓会会報「なよ竹」第二十五号、昭和十二年七月。
30 奥島尚樹「下田歌子先生世界一周教育視察2」（「下田歌子研究所ニューズレター」第六号、平成二十八年二月）。

※ 引用文献の本文は、一部片仮名、旧字表記など私に改めた箇所がある（注7・9・16・17・18・19・24・27・29）。

（くぼ・たかこ／実践女子大学下田歌子研究所研究員）